

談 話 室

京都大学でのサバティカル3ヶ月間の印象

私は外国での研究生活の期間が長く、カリフォルニア大学に来てからすでに17年も経った。この辺で日本の大学に留学してみたいと考えた。幸いカリフォルニア大学にはサバティカルという、7年に一回は研究室を離れて他の大学で新しい勉強をしていくという制度がある。そこで、京都大学の宮川教授と中川助教授にホストをお願いしたところ心よく受け入れて頂けたので、今年の1月から3月まで京大に滞在させて頂いた。

まず京大に来て気がついたことは、私はかなり日本の大学の事情を忘れていたということである。例えば、宮川研究室には修士課程の学生さんが多く、私は長く北米で教授業をやっていると修士では研究成果が出ないという既成概念にとらわれて、博士課程の学生だけを受け入れていた。京大の修士の学生さんはなかなか元気が良く、一生懸命やっておられるので感心した。研究発表会だとか、学生主催の謝恩会に出席させて頂いたが、彼らは研究も遊びも大活躍をしているという印象を受けた。もう一つの印象は、日本やはり伝統と人間関係を非常に大切にしている国だということであろう。京都大学では特に伝統を大事にされていることは聞いていたが、いろんなところでそれに気がつくことがあった。例えば、謝恩会の最後に皆で肩を組んで琵琶湖周航の歌を唱ったのは面白かった。私の居た頃の東大には、そういった風習はなかったように思う。また、桑原保正教授が退官記念講演およびレセプションをされたので私も出席させて頂いた。大きな講堂が満席で、彼が研究生活で完成させた仕事を見事にまとめて講義され、教授一同、および多くの学生諸氏が祝され立派なものであった。アメリカの場合には、教授の停年退職といっても大体は学部の中で、コーヒーとクッキーの集まりがあるぐらいという全く簡単なもので、本の出版などもあまりない。

また、人間関係で感心したのは、宮川研究室では、毎年、学生の卒業の際にホテルで祝賀会が開かれ、その時には研究室の卒業者、名誉教授、友人らも集って、盛大なパーティーを開催されることであった。お陰で私は懐かしい方々、深海先生、藤田先生、上野先生、西村先生、日農の内田氏らと旧交を暖める機会となり幸いなことであった。アメリカではこういった機会はない。日本の学生は大事にされていて、幸福だなと思った。

私の仕事の上では、中川先生、赤松先生、それに大東先生と共同研究の計画をいろいろ話し合える機会があったの

は幸運であった。学問の上でも京大の伝統はずっと続いており、武居三吉先生や中島稔先生らが創始者として開発された手法、例えば天然物を生物調節化学のお手本として作用機構を探索して行くというアプローチが、現在も受けつがれているということを感じた。また、藤田先生が始められた構造活性相関の研究の方も、今は素晴らしいコンピュータのプログラムになっているが、ずっと続いて発展されていることが判った。アメリカの大学では人の移動が激しく、技術的なことでもずっと一教室、または一学科単位で持続させることはとても難しい。もちろん、定量分析化学科みたいな分野によってはそういうことが可能になる場合もあるが、我々の場合には化学の合成反応等の技術を受けついで行くのはとても困難になって来ている。宮川研究室では、博士クラスの若い学生達が、合成をどんどんやって居られるのを見て羨ましく感じた。一方、生化学の分野でも、分子生化学の手法、及び研究目標がどんどん増えているのはアメリカとよく似ていて、私の会ったうちでは、若い助手、助教授クラスの人達が深い造詣を持つ人が多く、私といろんな話がはずみ、私には良い勉強となった。私の見たところ、前に聞いていた程このクラスの若い学者達が、雑用に追い廻されることはなく、研究を一生懸命している人が多くて心強く思った。

一方、教授の忙しさは大変なものだということを再認識した。日本の大学教授は、正式にトレーニングを受けた秘書が毎日の研究室運営の雑用補佐をしてくれるのではなくて、事務局という独立の機関が学部全体の事務を取り扱う仕組みになっている。従って30人も居る大部屋の研究室でも、運営に関する雑用をしてくれる人が少ない。日本独特の永久雇用制、国家公務員採用等の機会も、そういった人達を育てあげることのさまたげになっている一因であろう。もちろん、アメリカの教授も忙しいが、私は今回、日本の教授の方がもっと忙しくて大変だという感じを受けた。そういった印象を受けた原因の一つは、私の訪問が、たまたま時期的に国立大学法人化という大切な時期にぶつかったからかもしれない。この話は、他大学の教授連と話をしてもいつも良く話題に取り上げられ、如何に日本の大学関係者がこのことに、危機感を抱いているかということが感じられた。もちろん、今迄自動的に来ていた講座費の額が下がり、研究費は競争制度となるといった変化は大変なことで、前途に心配が出るのは無理もない。但し、アメリカ的

な見方では、京大のような有名校は学生も優秀なのが集るし、今までの投資があった学者の層も深いので、それほど心配の必要はないように思う。小さい大学はそれぞれの特色を出す必要性と、その地方に合ったプログラムを推進する必要があるのではないと思われる。

学問以外のことで、京都の冬は思ったより寒くなくて、冬のため観光客の少ない神社仏閣や庭園を訪れて、また雪のあるのがとても風情があり命の洗濯をしたような気がした。京都は美味なものも多いし、物価も昔ほど高くなくて、とても住み心地が良い感じを受けた。それに何ととっても、

日本は私の故郷であるのでいろんな友達が多く、この際、実に多くの人々と旧交を暖めることが出来たのは一番の喜びであった。日本農薬学会大会にも参加できたし、中川助教授には私の研究室の同窓会を催して頂き、北海道から九州までの懐かしい方々に来て頂き、最高の時を持つことが出来た。

最後になりますが、この稿を通じて、ホストをして頂いた宮川恒教授、および中川好秋助教授に心から感謝の念を表したいと思います。本当に有難うございました。

松村文夫 (カリフォルニア大学デービス校)